

建学の精神と 酪農学園大学の使命



RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学



酪農学園大学公式HP

「建学原論」 テキスト

建学の精神と

酪農学園大学の使命

題字…原田 勇
(元 学園長)

＝はじめに＝

建学原論の後編では、前編の理解編に引き続いて、現状編と継承編として、学内外の複数の講師によって講義されます。

現状編の講義では、酪農学園の理事長および宗教主事、酪農学園大学学長、酪農学園とルーツを同じくする雪印メグミルクから迎えた講師によって、歴史を踏まえながら未来に向う現在進行形の状況と位置付けられる内容が展開されます。そして教員による「農・食・環境・生命」の教育・研究現場から、事務職員による学生生活全般および将来ビジョンに関して、講義が行われます。

継承編では、三名の卒業生を講師としてお招きし、三回にわたって講義が行われます。社会の様々な現場で、本学の建学の理念を基に活躍されている事実に出会ってほしいと思います。

後編の本テキスト「建学の精神と酪農学園大学の使命」には、各講師のプロフィールと講義のレジユメをまとめています。あらかじめ目を通して、講義では、生の声で語られる内容に耳を傾けてください。

二〇一一年度から開講された建学原論の継承編講師一覧を巻末に挙げています。三十八名の方々の活躍されている分野は多岐にわたっていることが一目瞭然かと思えます。酪農学園大学は、二〇二〇年度に開学六〇周年を迎えました。卒業学科の様々な名称から、大学の教育・研究体制の拡大発展の過程を垣間見ることもできるでしょう。参考となれば、幸いです。

目次

はじめに

現状編

1 酪農学園の精神

「三愛主義」について

朴 美愛

2 酪農学園の使命

「やる気」はどこから湧いてくるか ↳ 自分がつくる行動習慣↳
黒澤西蔵の追い求めた世界観 ↳ 循環農法図とSDGs ↳

高島 英也
岩野 英知

3 酪農学園の建学と酪連

↳ 北海道酪農の振興を目指して↳
酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神

下村 善計

4 建学の精神と「農・食・環境・生命」

健土健民から考える人間栄養学
生物多様性保全の本質と建学の理念
技術者として信頼される技術を考える
福祉動物を科学的に理解する

小林 道
立木 靖之
堂地 修
林 英明

..... 1

..... 4

..... 8
..... 12

..... 16

..... 20

..... 22

..... 24

..... 26



5	建学の精神と酪農学園大学の学生が目指す進路 未来のための「今」を大切に 自分の人生は自分で決める	村上 正弥 奥山 航	28 30
---	--	---------------	----------

継承編

1	酪農学園の教育理念の継承Ⅰ 仲間とともに歩む農業の未来	徳田 善一	32
---	--------------------------------	-------	----

2	酪農学園の教育理念の継承Ⅱ 学芸員として、キリスト者として	持田 誠	34
---	----------------------------------	------	----

3	酪農学園の教育理念の継承Ⅲ 思い描いた通りには全然ならない！ それでも酪農学園での学びは生きるゝ	梶田路津子	36
---	--	-------	----

	継承編講師一覧（二〇二一・二〇二四年度）		38
--	----------------------	--	----

	おわりに		41
--	------	--	----



酪農学園の精神

「三愛主義」について

はじめに

酪農学園と私の最初の出会いはとても不思議なことである。日本に来る前から私の周りには酪農学園大学卒業生や繋がりを持っている人がいたからである。幸いなことに、その人たちは「三愛主義」に生きている人たちであった。彼らは日本だけではなくて、世界中で「神を愛し、人を愛し、土を愛す」という「三愛主義」を実践し、持続可能な共に生きる世界のために働いているのである。この出会いは私の誇りでもある。

創立者黒澤西蔵はなぜ建学精神を「三愛主義」にしたのか

私立学校において「建学精神」とは、その私学の存在の目的を表すとても大切なものである。だから、「建学精神」を正しく知ることとは本学での学びを確かめる土台になるのである。酪農学園の母体になるのは一九三三年に創立された酪農義塾である。酪農義塾は社会の必要に応じて変化と共に成長してきたのである。

日本は一九四五年敗戦によって一九四六年には新しい「日本国憲法」が公布されるのである。そして、教育においても皇道を基調としたこれまでの教育理念は崩壊し、新たな教育理念が必要とされたのである。酪農学園においてもこのような転換期を迎えて、これからの教育理念をどこにおくかを真剣



朴 美愛
(パク ミエ)

● 所属

学校法人酪農学園宗教主事

● プロフィール

- ・大韓イエス教長老会神学校・大学院で神学、牧学、宣教学を学ぶ。宣教師、牧師である。
- ・韓国で教会の牧会を終え、一九九一年ボランティア(栃木県・アジア学院)として来日したことがきっかけに、一九九四年宣教師として再び来日し現在に至る。

に協議することになるのである。そして、同年九月一日、学園の教育理念をキリスト教の聖書に置くということを理事会で決定したのである。すなわち、学園の教育を聖書に基づく人間教育を通して、学生たちは生き方を学び、価値観と世界観を広く形成し、「三愛主義」を実現することを目指すことにしたのである。酪農学園の「建学精神」を「三愛主義」にした背景には創立者黒澤西蔵の聖書とキリスト教、そしてデンマークのグルンドビー牧師との出会いから成り立った個人史と当時の日本の状況が大きな影響を与えたことを看過してはいけないのである。

「三愛主義」について

「三愛主義」とは「神を愛し、人を愛し、土を愛す」ということである。

「神を愛す」とは、天地万物の創造主なり、愛なる神を知り、敬い、従うことである。それは、人が真理を求め、従う生き方の中、生かされていることを感謝し、他のものに対して最善を尽くすことに繋がるのである。すなわち、聖書から教えられている神の教え（愛・命・自由・平等・尊厳・平和・人権など）に従うことである。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』（マタイ二二・三七～三九）と、「神を愛するとは、神の掟を守ることです。」（ヨハネ一五・三）と、聖書に記されている。

「人を愛す」とは、人種・国籍・文化・宗教・性別など自分とは異なるすべてを超えて、「人」はひとり一人が尊いものであることを認識し、互いを受け入れ、理解し合い、助け合って共に生きることである。「隣人を自分のように愛しなさい」と教えられているが、それ以上に「敵を愛し、自分を迫

・アジア学院 (Asian Rural Institute) 職員、日本キリスト教団・西那須野教会教師、酪農学園大学教員（キリスト教学担当）、日本キリスト教団・野幌教会牧師を経て、二〇一九年から酪農学園宗教主事として勤めている。

出身地

大韓民国ソウル特別市

害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四)と。目には見えない「神を愛す」ことは「人を愛す」ことに現れるのである。「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内であらうされているのです。」(ヨハネ一四・十二)と、聖書に記されている。

「土を愛す」とは、天地創造の物語には「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。」(創世記二・一五)と、記されている。すなわち、人の住むところである「土」を始めとする自然や環境などの被造世界を管理・保存することが「土を愛す」ことであり、神から委託された人間の使命であると、聖書は教えている。「土を愛す」の実践は「健土健民」に表す、持続可能な世界を目指すことである。そして、「土」から育てられるものが動物であり、植物であり「人」の食べものとして、「命」を支えるものになるのである。それで、「土」が健康でなければ健康なものは育てられないし、健康な人も育てられないのである。このようなことは、創造時からの不変な「真理」で、人間には「土」を耕し、守ることの使命が与えられているのである。黒澤西蔵は「土を愛すとは、人類の母体である土、母なる大地に心血を注ぎ豊かにすることだ」と言ったのである。

では、「愛」とは何か。「愛」は可愛がる、いつくしむなど辞書には定義されているが、「愛」は感情的なことだけではなく、その感情に伴う行動である。聖書には、「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。」(コリント一三・四・六)と、「愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」(ヨハネ一四・八)と、記されている。



C.S.・レイス (Clive Staples Lewis, 『ナルニア国物語』の著者) は、「愛」について『人間は、男女関係の愛 (eros) で生まれ、父母の愛 (storge) で育ち、友・兄弟の愛 (philia) で成熟し、神の愛 (agape) で人格が完成する』と語ったのである。本学の教育は、「建学精神」の「三愛主義」による人格の完成を目指すのである。

むすびに

皆さんは、多くの苦しみと共に様々なことを考えさせられたコロナ感染症による未曾有の時を乗り越えて今に至っているのである。何を考えさせられたのか。一つは、これからの「人間の生き方だ」と思うのである。そして、わたしたちはその答えを酪農学園の建学精神の「三愛主義」から見つけることができるのである。創立者黒澤西蔵は建学精神を「三愛主義」にした時に、「三愛主義は古今東西の永遠不滅の真理に照らすことだ」と言ったのである。そして、これを「実学教育」によって、体得させ、実践する人材を輩出させることを酪農学園の使命にしたのである。具体的には、皆さんの学びによってひとり一人は「生きるかたち」と「生きるちから」にすることである。そして、それぞれが自分の能力と才能を生かして、「神を愛し、人を愛し、土を愛す」人として持続可能な「共にいきる」社会と世界を目指して生きることである。そのために、広々とした自然豊かな恵まれた環境と様々な学びそして、出会いが備えられていることを忘れないで、日々を大切に、元気よく、楽しい学びの時を過ごすことを願うのである。



大学礼拝が行われる黒澤記念講堂内部



酪農学園の使命

「やる気」はどこから湧いてくるか ―自分がつくる行動習慣―

二〇二三年十一月、福岡市内のホテルで開催された「日本酪農青年研究連盟」主催の「第七十四回日本酪農研究会」は、約二八〇名の参加者をもつて実に盛大に執り行われました。その会場では、全国から六名の若き酪農家たちがそれぞれに実践している酪農経営を発表。いずれの発表も、酪農経営の未来に明るい光を感じる元氣溢れる発表でした。

懇親会の席上、私は、雪印メグミルク社の佐藤雅俊社長とお話をさせていただく機会に恵まれました。雪印メグミルク社と学校法人酪農学園とは、歴史上ルーツが同じであることは皆さんご存じの通りですが、私は、佐藤社長からの言葉をお聴きして、まさに目が覚める思いをいたしました。

『毎年社内、経営理念「健土健民」の意味するところを深め、一人ひとりが肚落ちするまで語り合う勉強会を開催しています。我々の創業と言える北海道製酪販売組合が、創業当時に掲げた「健土健民」の志を決して絶やしてはいけません。全社員が対象の勉強会です』と。私は、佐藤社長からその言葉をお聴きして、黒澤西蔵先生がかつて語っていた、『雪印は協同主義の見地から、私が、その理念に共鳴した同志とともに創立したものです。



高島 英也
(タカシマ ヒデオ)

● 所属
学校法人酪農学園理事長

● プロフィール

私は大学を出てすぐにビール会社の工場に勤務し、約三十年間工場現場で仕事をしてきました。工場勤務を選んだ理由は、人前で話をするのが苦手だと思っていたからです。五十七歳から四年間ちよつと、そのビール会社の社長も務めたのですが、社長を退任してから、その後様々な体験をしたこ

単なる営利会社じゃありません。』との一節を思い出していました。

私は、冊子『酪農学園の歴史と使命』私はなぜ酪農学園をつくったか『黒澤西蔵』の冒頭の一文、「酪農学園は普通の学校や大学とは違います」にハッとするものを感じ、またその三パラグラフ後の一文、「酪農学園は酪農民の浄財でできた学園だということです」の言葉に強烈に心を打たれて、一度現場を見たいと思い、二〇二三年六月一七日、初めて酪農学園のキャンパス内に足を踏み入れました。国道一二号線側の牧草地からつながる法面（傾斜部分）の刈りこみがとても綺麗に行われていて、冊子に書いてある通りの精神が、細部にも息づいていることを感じました。それが、理事長という重責を引き受けさせていただいた経緯です。実に単純です。二〇二三年七月一八日が正式就任日でした。任期は二年間、偉大なる先人たちの志に恥じない行動を一所懸命やろうと日々気持ちを新たにしています。

さて、なぜ我々は酪農学園の建学の歴史を学ぶのでしょうか？ 答えは、『そこに我々の存在理由があるから』だと考えています。今「自分がここで生きている意味」を納得できるからだと思います。そのためには、酪農学園のここまでの存在過程を、偉大なる先人たちが残してくれた言葉を噛みしめて、そこに感情移入までして体験することが欠かせないと思うからです。

乳牛一頭から酪農を始めた黒澤西蔵先生が、朝三時に起床して搾乳、牛の世話をし、それから牛乳を売り歩いた光景の写真を見て、皆さんは何を想

とが、今の自分にとってはとても貴重なモノとなっています。

出身地

福島県伊達郡保原町

像しますか？どんな気持ちになりますか？私はこの写真を見て、しばらく見とれていました。黒澤西藏青年の強い気持ちに憧れました。

組織で、何か新しいことを始めようとする際に、例えば、「さんで呼び合いましょう」との提案をしても、「その行動の意味は何ですか？どんな意味があるのですか？」との反応に終始し、いくら説明を尽くしても、場合によっては反対行動を起こす人たちがいます。偏見でモノを言っただけなのではないかと思いますが、いわゆる現代教育課程での学業偏差値が高かった「だけ」の人たちにそのような行動傾向が多いように思います。

いずれにしても、この黒澤西藏青年の最初の一步が、その後の「北海道製酪販売組合」の結成につながり、一九三三年の「北海道酪農義塾」の開学につながり、今や北海道の重要な産業である酪農の礎を築くことにつながって行くのです。まさに知行合一の極みだと思いませんか。

では黒澤西藏青年のその第一歩はいかにして生まれたかを考えてみましょう。その「発想」と「やる気」の源泉が、一体どこから、どのように生まれてきたのかです。ここは皆さんと意見交換をしたいところです。

私は、それを「強い不安」と「分厚い学びによって培われた思考習慣」の掛け算から生まれたと考えています。そしてその「分厚い学び」の基礎の一つは、一〇代の頃から学んだ水戸学であり、もう一つの基礎は、素晴らしい

人たちとの出会いから体験的に培われたことによると考えています。結果として、「不安」が強ければ強いほど、やる気が湧いてくる思考習慣が、様々な困難に直面しても、「現場」を自分で確かめ、「原理原則」を突き詰めて、適切に「相談」を起こす行動習慣を培ったのだと考えています。

今、私が「不安」と表現している言葉には「気づき」も含まれていると考えています。「気づく」ことを繰り返し、そこに「不安（これじゃいけない）」が芽生えないと、人は成長できないと私は信じています。成長する際には、時に自分を壊すことも必要と考えています。

あるお坊さんが、講話でこんなことを言っていました。「意志（いし）が濁ると、意地（いじ）になる」と。さて、意志が意地になる時はどんな時でしょうか？おそらく自分の事しか考えない、保守的な、変化を嫌う、そんな頑固な精神状態なのかもしれません。

無限の可能性を秘めている学生の皆さん、どうか酪農学園で体験的な学びを積み重ね、社会で大活躍して下さい。黒澤西蔵先生の言葉を借りれば、『叡智と天分を磨き、社会の良器となつて、人生の幸福を享受』してほしいです。天分とは、ご自身の持ち味です。必ず、皆さん全員が「唯一無二の持ち味」を持っていますから。

黒澤西蔵の追い求めた世界観 〈循環農法図とSDGs〉

はじめに

皆さんは、酪農学園大学にどのような思いで入学してきたのだろうか？
ある人は卒業後、獣医師や動物看護師として働きたい、また、酪農経営を学びたい、野生動物の保護管理について学びたい、管理栄養士、食品関連で働きたいなど多種多様な目的あるいは北海道の豊かな大地で学びたい、知人や親兄弟の勧めなど、様々な思いで入学してきたことだと思う。酪農学園大学「建学原論」は、他の科目に比べて学びの内容が異なる。「建学原論」は建学の精神、歴史、社会的役割や貢献、教育や研究の内容について学ぶ自校教育の一つである。私立大学は独自の建学の精神をもっており、酪農学園も創立者の黒澤西蔵が目指した人材養成の考え方を建学の精神として今も引き継いでいる。私も酪農学園大学の同窓生であり、ぜひ、なぜ、酪農学園大学という名前なのか、黒澤西蔵が何を我々に望んでいたのか、「健土健民」その言葉に込めた創立者の当時の思いを紐解きながら、現在の我々に課せられた課題をあらためて一緒に考えてみよう。

「酪農とはなんぞや」

人生の晩年、北海タイムス社社長に就任した黒澤西蔵は、その天職とした酪農の使命について、「酪農とはなんぞや」と自問、回想し、自身の言葉にて専門誌などに語っている。さて、皆さん、この問いにどのような返答をし



岩野 英知
(イワノ ヒデトモ)

● 所属
大学学長

● プロフィール

一九六九年鹿児島県鹿児島市にて生まれる。一九九〇年に酪農学園大学獣医学科に入学し一九九六年に卒業。その後、大学院博士課程を一九九九年に修了し、大阪大学たんばく質研究所、日本学術振興会海外特別研究員(MDアンダーソンがん研究所)を経て二〇〇三年より酪農学園

ますか？

酪農は、農業の一つで動物を飼育して乳を搾ること、まあ、そう考えますよね。確かに広辞苑には、「牛、羊などの乳汁を搾取またはこれを原料として牛酪、乾酪、練乳を製造する農業」とあります。黒澤酉蔵は、このように言います。「単に牛乳を生産するだけではありません。立派な牛のためには、立派な草が必要になり、そのためには立派な農場、牧草畑が必要になります」。さらにこのようにも言います。「牛が生産するものは、牛乳だけではないということです。もちろん牛乳が大切なことは、論をまたないところですが、牛を正しく大切に飼えば、しっかりとした子牛をどんどん産んでくれます。毎日どっさり、糞と尿を出してくれます。最後には自分自身の肉になります」。さて、みなさんもここまでの内容は理解できると思います。

農業は「天・地・人」の合作である

酪農とはなんぞや、その問いから農業を俯瞰する以下のような言葉で表現している。「地力を増進しうる作物を作りながら、家畜を飼養管理し、乳肉を生産し、糞尿を土地へ返し、より高度の家畜から乳肉を生産し、そして糞尿を土地に返す。そういう農業だと。しかもこの循環は、天・自然の摂理と、地・母なる大地と、人・農人・真実の人間が三位一体となって初めて完成するものです。農業は「天・地・人」の合作である」。

このことは、農業は天、地、人、どれもが欠けてもうまくいかないと同時に、酪農は、糞尿を土地に返すことにより、そこに循環が生まれ、土地もよ

出身地

鹿児島県鹿児島市

大学・獣医学化学研究室の講師として着任。現在は獣医学化学ユニットでファージセラピーの応用研究を展開し、基礎的な発見から社会の課題を解決できるような研究に取り組んでいる。キャンプ、スキー、山登り、サウナ好き。ラーメンはガツンと濃い山岡家が好き。

くなり、家畜も良くなり、人間の健康が増進するということをも示しており、循環農法図の原点となる考え方がそこには根付いている。

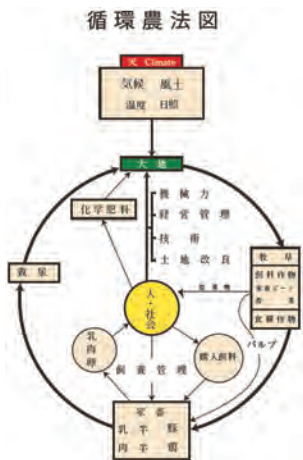
循環農法図

農業は「天・地・人」の合作であるとする考えから発展させて酪農、畜産を組み込むことで循環させることができるという考え方が、循環農法図である。天（気候、風土、温度、日照）と大地、そこに人が中心となり家畜を飼養管理することで、大地から得た牧草が家畜を通して人に乳、肉、卵を与えることができ、その家畜の糞尿は大地に戻され、大地は肥沃になり恵みをもたらし、全体が循環する。この循環農法図では、酪農を、乳を搾取する手段としてのみ考えるのではなく、大地との循環を作ることでも永続的な農業が成り立つということを端的に示している。その循環の中心にあるのが人であることも忘れてはならない。人が正しくこの循環の法則を理解し、正しく循環させること、そのことが大事であると循環農法図は語っている。

現代において再注目される循環農法図の理解

現在、世界の国々は様々な課題に直面している。国連は二〇二〇年に世界の飢餓状況が激しく悪化していることを報告している。世界人口の一〇人に一人にあたる最大八億一〇〇万人もの人々が飢餓に苦しんでいると推定されている。このような食料危機は、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大の影響の他に、各地で起きている紛争、気候変動なども影響しているとさ

れている。特に気候変動の影響は深刻であり、世界各国で干ばつ、洪水、ハリケーン、サイクロンなど自然災害が繰り返し起こり食料生産に打撃を与えている。日本においても、最近、集中豪雨などの自然災害がたびたび発生し、多くの人々が被害に遭い、復興に巨額の費用と時間を要している。このような世界状況を踏まえ、二〇一五年九月の国連サミットにおいて、持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) が、加盟国の全会一致で採択された。SDGsとは、「持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」に記載された二〇三〇年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。このようなSDGsという考え方は、およそ一〇〇年前より黒澤西蔵が描いた循環農法図の中において、既に記されていたことが理解できる。我々は、黒澤西蔵が創立した酪農学園大学を受け継ぐ者として、この循環農法図からその考え方をどのように発展させ、実践し、そして社会に貢献しているのか、今、問われている。





酪農学園の建学と酪連 ～北海道酪農の振興を目指して～

酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神

はじめに

学生の皆さん、酪農学園の「建学原論」と雪印メグミルクの関わりが想像できるでしょうか？

実は「酪農学園は農民が農民のために作った学校」、「雪印メグミルクは農民が農民のために作った会社」であり、酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神は同じなのです。

酪農学園と酪連（現：雪印メグミルク）の生い立ち

一九二三年（大正一二年）九月、関東大震災が発生し、政府は物資窮乏や価格暴騰に備えるため食料輸入関税を撤廃。これに伴い、海外から安価な乳製品が大量に流入、さらに売上げ不振に喘ぐ練乳会社の生乳買入制限等により、北海道の酪農民は窮地に追い込まれた。

「まさに農民の死活問題であり、このままでは北海道開拓の中心となる寒地酪農も挫折する。どうしても農民による、農民のための生産組織を」という黒澤西蔵らの呼び掛けに、零細な酪農民たちが立ち上がり、バラバラであった個々の酪農民が、協同の力によって自らを防衛し、発展させんとする意思が結集され、一九二五年（大正一四年）「有限責任北海道製酪販売組合（製



下村 善計

（シモムラ ヨシカズ）

● 所属

雪印メグミルク株式会社
酪農部北海道酪農事務所
（中標津駐在）

● プロフィール

一九九三年酪農学園大学農業経済学科卒業。一九九三年雪印乳業株式会社（現雪印メグミルク）入社。神戸工場、徳島酪農事務所、北海道酪農部、社長室、秘書室、人事部、酪農部、磯分内工場、（二社）Jミルク出向、西日本酪農事務所、酪農総

酪組合」が設立された。その後、製酪組合に加入する者が増え組織が拡大したため、一九二六年（大正一五年）、全道を網羅した「保証責任北海道製酪販売組合連合会（酪連）」が組織された。酪連は、その後、合併等を経て、一九五〇年（昭和二五年）雪印乳業株式会社（雪印メグミルクの前身企業の一つ）となった。

一九三三年（昭和八年）、酪連の専務だった黒澤西蔵は、酪連事業に一定の目処が立ち、かねてから胸の奥に温めていた酪農民教育の施設「社団法人北海道酪農義塾」開校の私案を開陳し、関係機関に協力を要請した上で、同年九月の酪連の臨時総会に提案し承認された。同年一〇月、札幌市苗穂の酪連敷地（雪印メグミルク登記上本店）内に塾舎を新築し、翌年二月、全道から選抜された生徒を迎えて始動した。北海道酪農義塾は、その後、酪農学園へと発展していった。

このように、酪農学園と雪印メグミルクは、ともに北海道酪農の振興を標榜して創立され、そのルーツと精神を同じくしている。

雪印メグミルクの存在意義・志（企業理念）

二〇二五年（令和七年）、雪印メグミルクグループは創業一〇〇周年を迎えた。これを機に、創業の精神「健土健民」を社会課題解決の精神として捉え直し、これから先の社会課題である「食の持続性」実現に向けて、ステークホルダーと共に好循環の輪を拡げていくという意志の下、存在意義・志を「健土健民」、コーポレートスローガンを「Love Earth. Love Life.」へと刷新した。

次の一〇〇年に向けて、これまで脈々と受け継がれてきた創業の精神を、

合研究所勤務後、現職。

● 出身地

愛知県知多郡美浜町

● 雪印メグミルクの沿革（雪印メグミルクHPより）

一九二五年有限責任北海道製酪販売組合設立

一九二六年保証責任北海道製酪販売組合連合会（酪連）に組織変更

「雪印」商標決定
一九四一年（株）北海道興農公社に社名変更

一九四七年北海道酪農協同株式会社（北酪社）に社名変更

一九五〇年雪印乳業（株）、北海道バター（株）（後のクロバー乳業（株））に分割

一九五八年雪印乳業（株）、クロバー乳業（株）両社合併社名雪印乳業（株）に

二〇〇三年雪印乳業（株）

あらためて存在意義・志と定めたことは、当社グループの決意だと思う。酪農と乳業は車の両輪、一体化産業と言われて久しいが、当社グループは、そのルーツや精神、企業理念、目指すべき未来も含め、国内酪農生産基盤に軸足を置き、酪農生産者と共に歩み、これからも歩もうとしている企業であり、こうした考えの下、酪農乳業の発展を目指し様々な事業活動を展開している。

酪農振興を目指して

当社は牛乳乳製品メーカーであり、本業を通じた安定的な生乳取引やミルクの新しい価値創造によって、持続可能な酪農経営（酪農生産への貢献）に繋げることを責務としているが、①全国の酪農家が組織する実践的研究組織「日本酪農青年研究連盟（略称：酪青研）」の活動支援、②酪農現場に即した実践的な調査研究や経営管理支援等、様々な活動をしている。

終戦直後の北海道の酪農は、極端な飼料の欠乏と価格の高騰、乳牛の屠殺増加、骨軟症の蔓延、繁殖障害の増加等から危機に陥った。この事態を重視した酪農青年の間に、北海道の酪農を振興しようという機運が全道的に高まり、当社もまた一九四八年（昭和二十三年）初頭から酪農再建運動を展開、これらの酪農青年の組織化を図るため酪農青年研究会の設立を促した。当社の提唱は大きな反響を呼び、全道各地に自主的研究組織として酪農研究会が誕生、さらに全道的組織として同年七月、北海道酪農青年研究連盟が発足した。同連盟は、その後組織を拡大、北日本酪農青年研究連盟、次いで日本酪農青年研究連盟と改称され現在に至っており、当社は酪青研発足以来、活動支援を続けている。

酪青研では、優秀な酪農経営を実践している酪農家の成果発表の場、研究

から市乳部門を分離し日本ミルクコミュニティ（株）へ二〇〇九年日本ミルクコミュニティ（株）と雪印乳業（株）が経営統合し、共同持株会社「雪印メグミルク（株）」設立

二〇一一年雪印メグミルク（株）が日本ミルクコミュニティ（株）および雪印乳業（株）を吸収し、新生「雪印メグミルク（株）」誕生

●雪印メグミルクグループの事業分野（雪印メグミルクHPより）

○乳製品
バター、マーガリン類、チーズ、スキムミルク、その他

○市乳
牛乳、乳飲料、ヨーグルト、デザート、その他

○ニュートリション

粉乳、機能性食品、栄養

会で発表された内容を各地で自分の経営に活かしていく研鑽の場として、毎年「日本酪農研究会」を開催している。経営発表の最優秀賞には黒澤酉蔵の名を冠した「黒澤賞」及び農林水産大臣賞が贈られ、その栄誉が讃えられるとともに、参加者は各々がリーダーとなり地域酪農の中心として活躍されている。

酪農総合研究所は、酪連創立から五〇周年となる一九七六年（昭和五一年）、酪農乳業の共存共栄を目指すことを目的に設立された。具体的な活動として、個々の酪農家にご協力を頂き、圃場管理や飼養管理等の課題解決に向けたフィールド調査・研究を行い、得られた知見・技術は「酪総研シンポジウム」等の開催を通じて、広く酪農家への経営支援へと展開しており、国内酪農生産基盤の強化と持続的発展、食糧の安定供給に寄与する事業を推進している。このように黒澤酉蔵の哲学の基礎である「酪農は健土健民の母」という思想は、今もなお、当社グループの中にも脈々と受け継がれ、酪農振興を目指した取組みを継続している。

むすびに

今日の酪農学園と雪印メグミルクグループが存在しているのは、黒澤酉蔵の精神を受け継ぎ、今に繋いできたことに他ならず、その精神や信念が如何に崇高なものであり、後世の人々に大きな感銘と影響を与えてきたことの証でもある。

この「建学原論」での学びが、酪農学園に入学された学生の皆さんの有意義な学園生活はもちろんのこと、その後の人生においても心の支えとなり、さらなる飛躍をされんことを願っている。

剤など

○飼料・種苗（雪印種苗）
飼料、種子（牧草、飼料作物、野菜）、造園、肥育牛など



建学の精神と「農・食・環境・生命」

健土健民から考える人間栄養学

人間栄養学を支える健土健民の理念

栄養とは、生物が生命活動を維持し、成長やエネルギーの供給などを行うために必要な物質を取り入れることである。本学では、様々な栄養学に触れることができる。作物のための栄養学、家畜のための栄養学、食品の機能や成分としての栄養学、そして人間のための栄養学である。それぞれの栄養学は、最終的に人間栄養学にも関係し、私たちの生命の維持はもちろんのこと、健康増進、疾病の治療や回復にも役立てられる。つまり、「健やかな土地から生み出される健やかな食物によって健やかな生命が育まれる」「健土健民」の理念は、人間栄養学の根幹といえる。一方で、人の健康は栄養などの生物学的要因だけでは説明できず、複雑である。本回では人間栄養学を中心に、いくつかの研究を取り上げ、人の健康を決定する要因について多角的に考える。

人の健康を決定づけるのは何か

一九七七年にアメリカの精神科医ジョージ・エンゲルによって提唱された、生物・心理・社会モデルという概念がある。これはヒトの病気（または健康）を生物学的要因、心理的要因、社会的要因から包括的に捉えるアプローチである。感染症であれば、微生物やウイルスなどの特定の病原体が原因となる



小林 道
(コバヤシ トオル)

● 所属

農食環境学群 食と健康学
類（管理栄養士コース）給
食栄養管理研究室

● プロフィール

・函館短期大学食物栄養学
科卒業
・北海道大学大学院医学研
究科医学専攻博士課程修
了

・管理栄養士、博士（医学）。
栄養担当官として陸上自
衛隊駐分屯地（函館・礼
文・倶知安・島松）に約

が、昨今増加し続けている生活習慣病は、いくつかの要因が重なって発病することが多い。レスター・ブレスロー博士が提唱した、有名な七つの健康習慣(①禁煙 ②定期的な運動 ③飲酒はしないか適量 ④一日七〜八時間の睡眠 ⑤適正体重の維持 ⑥朝食を食べる ⑦間食をしない)では、六個以上の健康習慣がある人は、三個以下の人と比較して、約一〇年寿命が長くなることが明らかにされた。しかし、これらの健康習慣も、心理的要因や社会的要因に左右される。ストレスが多ければ、たばこを吸いたくなったり、酒を飲み過ぎたりすることもある。仕事や学業が忙しければ、運動不足や睡眠不足が起こりうる。食品(栄養素等)の摂取も生活習慣の一部であることから、社会的要因や心理的要因の影響を受ける。したがって、人の健康は、心身の発達や社会的側面から、ライフステージを含めて考える必要がある。

さらに、栄養状態が精神的健康に直接的に関係することがわかってきている。魚介類、野菜類や果物類の摂取などの健康的な食事により、うつ病などの精神疾患を予防できる可能性がある。私は、これらの研究成果に着目し、妊婦の食習慣と産後うつ病の関連について研究を進めている。これまでに、妊娠中に持ち帰りの惣菜や弁当の利用頻度が高いことや、夜食をとる頻度が高いことが、産後うつ病のリスクとなることが明らかになっている。現在は、妊娠中の体内ミネラル量と産後うつ病の関連についての検討を進めている。

建学原論を履修するみなさんへのメッセージ

「栄養」は、皆さんの身体のもとなっているだけでなく、心にも影響を与え、人生を支える力がある。栄養が満たされていなければ、自己実現は難しい。自分の力を最大限発揮するために、第一に栄養状態を良くすることを考えてほしい。まずは、簡単なものでよいので「朝食」は必ず食べよう。

出身地

北海道函館市

一〇年間勤務したのち、二〇一五年より本学に着任。専門は社会医学、栄養疫学。現在は、妊娠期の栄養状態と産後うつ病の関連解明のための研究を進めている。

趣味…食べ歩き(特にラーメン)、料理、軽いランニングとサウナ

生物多様性保全の本質と建学の理念

なぜ自分がこの道に入ったか、明確な理由は覚えていない。ただ子供のころから野山で遊ぶことが単純に好きで、学校の帰り道に友達と川で釣りをしたり、夏休みはやはり友達と山に行つて魚を突いて飯盒炊爨したりが楽しかった。大学では林学（現在の森林科学）に進み森林管理について学んだ。就職してからも相変わらず仕事で山野を歩いてデータを取る日々だったが、いつ頃からか「どうして自分はこの分野に来たか」と考えるようになった。それは「迷い」ではなく「自分探し」だったかもしれない。

三〇歳過ぎのある日のこと。サロベツ湿原での調査を終えて、夕日と日本海が見える砂丘に立つて道路を走る車や利尻山を見た時、「ああ」と急に明確な答えが頭の中で閃いた。自然環境と人の「境界線」に立ち、この両者が共存する道を探すがやりたい事なのだと。嬉しくて調査チームや妻に話した。繰り返したが、自分の目標をはっきり認識したのは三〇代前半のことだった。建学原論を学ぶ二〇歳前後の皆さんの中には、もうはっきりとした目標がある人もいれば、そうでない方もいるだろう。しかし、それは全く普通の事で、ある日突然何かが閃くことがあると思う。

自然環境と人が共存するには何が必要だろうか。近年、市街地にシカやクマ等が出没するような問題もあるが、単に駆除すれば問題が解決すると思うのは間違いである。森林や野生動物と人の間には「見えない境界線」があって、その線上の「お互いの我儘」で問題が発生するのだ。問題解決のためには、地域住民が「どこまで我慢できて、どこから我慢できないか」という落着点



立木 靖之
(タチキ ヤスユキ)

●所属

農食環境学群 環境共生学
類 生物多様性保全研究室

●プロフィール

・京都府立大学農学部林学
科卒業

・北海道大学農学部農学研
究科環境資源学専攻 博
士課程修了

・特定非営利活動法人
ENVISION 環境保全事務
所 研究員（二〇一六年
五月まで）

野生動物管理、自然再生

を模索することになる。そうなると地域住民等と話し合いが必要になるが、人心を動かすのは実に難しい。不思議に思われるかもしれないが、生物多様性保全のために研究室で主に教えるのはコミュニケーション技術である。自然は嘘をつかない。人は主に主観的である。問題解決の本質は結局のところ人と人の関係なのだ。落着点を見出すために客観的な科学的知見と事実データが必要となる。これが大学で専門科目を学ぶ意義である。

また、大学という外部から来る私たちの姿勢も地域住民の行動や考えを変えるための重要な要素である。ある地域に入り込んで住民の方々と仲良くなつて信頼関係を醸成し、土地柄を理解し、その地域に存在する独特の自然環境に感動してそれを伝える必要がある。地域の生物多様性が保全されることで農林水産業が栄え、家庭の幸せと持続可能な社会が形成されるだろう。逆に無理な開発、乱獲、乱伐をすると自然にいつか返しを受ける。これらの概念は、実は全て本学の建学の精神である「三愛主義」「健土健民」「循環農法」にそのまま通じる。過去に大きな文明が森林を乱伐し、森林の消滅と共に文明が消滅した事実が示すように、豊かな生物多様性の保全と農林水産業は国の根幹である。これをないがしろにする国に未来はない。本学は、開発盛んであったろう過去においてその真髄にいち早く着目し、建学の精神にこれを謳い現在に至る。この理念を理解できれば、生物多様性と人の境界線に在る「見えない境界線」を融解させることができるだろう。本講義で建学の精神を皆さんが学ぶ意義はここにある。私も皆さんと共に学び、地域の生物多様性を守る意義を一人でも多くの学生に伝えていきたい。

事業等の業務に従事

・ Universiti Malaysia
Sabah, Institute for
Tropical Biology and
Conservation 着任（准
教授）（二〇一六年六月、
二〇一八年三月）

・ 二〇一八年四月より現職
趣味…家庭菜園、工作、美
味しいものを取って来て料
理してお酒を飲む

出身地

京都府京都市

技術者として信頼される技術を考える

ブラジルとアルゼンチンに挟まれた南米の小さな国、ウルグアイは畜産が盛んな国であり、サッカーの強豪国でもある。ウルグアイは私にとって繁殖技術者として大切な経験をした所である。私は、農林水産省家畜改良センター在職中に念願であった海外出張の機会を与えられ、国際協力事業団（JICA）の短期専門家として二カ月間、ウルグアイの首都モンテビデオにあるウルグアイ共和国大学において受精卵移植技術の技術移転に従事した。

ある日受精卵移植のために大きな農場に行くことになった。その日は、乳牛から受精卵を採取して、他の牛に移植する予定であった。農場に到着し農場主を紹介され、受精卵採取を始めた。立派な体格のホルスタインが既にシユート（梓場）に入れられていた。子宮洗浄（受精卵採取）も難なく終わり、多くの受精卵が採れたと確信して顕微鏡で受精卵を探した。しかし、受精卵が一個も見当たらず、未受精卵の一個もない状況であった。何回探しても受精卵は見当たらず焦りが募るばかりであった。顕微鏡を見る振りをしながら、この困った状況をどのように説明すべきか自問自答を繰り返していた。「牛に問題があるのではないか？」という言い訳を最初に思いついた。しかし、日本から遙か遠く約三三時間飛行機を乗り継いで辿り着いた地球の裏側に來て「牛の所為（せい）にするのはカッコ悪いか？」など、さまざまな想いが思い浮かんだ。しかし、経験から、もう一度子宮洗浄を行えば受精卵が少しでも採れるのではないかという考えが浮び、牧場主にお願いすることにした。



堂地 修

（ドウチ オサム）

● 所属

農食環境学群 循環農学類
家畜繁殖学研究室

● プロフィール

本学酪農学部酪農学科を卒業後、農林水産省入省（日高種畜牧場、家畜改良センター、中国農業試験場畜産部、新冠牧場に勤務）。主に牛の受精卵移植技術の開発・普及に従事。本学では受精卵移植技術、高泌乳牛の繁殖生理、牛の繁殖管理技術、肉用牛の飼養管理な

牧場主に「大変申し訳ありません。受精卵採取を失敗しました。もう一度やらせてもらえないでしょうか？」と通訳して貰った。すると牧場主は「もうやなくていい。次の牛の受精卵採取をして欲しい。」と言っているとスタッフの一人が通訳してくれた。「受精卵が一個も採れなかったのに、どうして次の牛の受精卵採取を行えと言うのか？」と尋ねると、「最初の牛は、あなたの技術を見るための試験です」とスタッフが耳打ちしてくれた。

牧場主は、日本から来た若い私の技術を見ずに大切な自分の牛を触らせるつもりが最初からなかったようである。考えれば当然のことであるが、私の技術を全く信じておらず、これまで何回か受精卵採取を試みても一度も受精卵が採れたことのない牛で私を試験したということであった。その時、私は正直に伝えて良かったと胸をなで下ろしたことをよく覚えている。技術者は年齢や立場で評価されるのではなく、技術と知識で評価されるものであり、誤魔化しても結果が良くなることはなく、ただ信頼を失うことになるということであらためて実感したことを覚えている。

私は本学卒業以来、牛の繁殖技術に関する技術開発とその普及に携わってきた。日本の畜産に少しでも貢献したいという想いは、農林水産省に入省して間もない頃に「世の中に役立つ仕事をしなさい」という上司の言葉が始まりである。繁殖技術者にとって大切なことは様々あるが、牛は農家の経済的な財産であり、精神的な財産でもあることを覚えて、正直に仕事をするのがもつとも大切であると思っている。そのことが、信頼される技術者につながるはずである。

●出身地

鹿児島県鹿屋市

らびに繁殖技術を用いた黒毛和種の育種改良・牛群整備等について研究。産業の発展に貢献できる仕事とは何かを考えていきたい。牛の技術者は、観察とデータに支えられた知識と技術を求め続けてはじめて結果につながる判断ができるようになる。

福祉動物を科学的に理解する

はじめに

動物を飼育管理する上で、過度なストレスの負荷は動物の心身の健康や成長など重大な影響をおよぼすことがあるため、福祉動物（アニマルウェルフェア）の観点からも、ストレスをできるだけ軽減する管理が求められている。アニマルウェルフェアの国際的な福祉基準としてイギリスの農用動物福祉審議会が五つの自由①空腹・渇きからの自由、②不快からの自由、③痛み、損傷および病気からの自由、④正常行動発現の自由、⑤恐怖・苦悩からの自由という概念を提唱している。これら五つの自由は現在、家畜だけではなく、愛玩動物、展示動物および実験動物など、人間の飼育下に置かれたすべての動物に対する福祉基準となっている。アニマルウェルフェア評価において指標となり得るものとしてストレス評価がある。動物のストレス評価として行動学的評価と生理学的評価があり、行動学的ストレス評価は現場で動物の維持行動や社会行動、異常行動などを観察することにより、その場でストレス評価を行い対処することができるため、利用しやすい評価法であるが、主観的な評価となることがある一方で、生理学的指標を用いたストレス評価は客観的な評価が可能である。

生理学的ストレス評価と指標

生理学的にストレスを評価する際、何らかのストレス要因に対して生理学的な反応を示すものを指標として用いており、グルココルチコイド、活動電位、心拍数、血圧、呼吸数、体温、伝達物質、血球成分、代謝産物、代謝性ホル



林 英明
(ハヤシ ヒデアキ)

●所属

獣医学群 獣医保健看護学
類 動物生命科学ユニット

●プロフィール

九州大学農学部畜産学科を卒業後、同大修士課程では附属農場で管理・行動学を専門とし、博士課程では東北大学農学研究科にて代謝生理学を専攻する。大学院修了後は酪農学園大学に採用され、獣医生理学の教員となる。二〇二一年より看護学類に異動し現在に至

モンなど数多くの指標がある。これらの生理学的指標の中で最も使用されているのは血中コルチゾールである。コルチゾールはグルココルチコイドの一種であり血糖値を維持するために働いているホルモンである。動物はストレスに曝されると副腎皮質からコルチゾールが分泌されるが、そのストレスが精神的なものであっても身体的なものであっても鋭敏な反応を示すため、指標として利用しやすいという利点がある。しかし、血中コルチゾールを用いる場合、多くは複数回の採血を必要とする。血液の採取は侵襲的であり、それ自体がコルチゾール値の上昇につながる可能性がある必要がある。

近年、様々な動物種において血中のコルチゾールが糞便や尿、唾液、乳汁、被毛などに移行することが明らかとなっており、痛みや苦痛を伴わずに採取できる評価法として注目されている。これらのサンプルは、どのようなストレス評価を行いたいかによって利用するサンプルを選択する必要がある。例えば、唾液中のコルチゾールは血中のコルチゾールと高い正の相関を示すため、唾液中コルチゾールは血中コルチゾールの代用として使用することが可能である。また、糞便や尿中におけるコルチゾールは数時間～数日における血中コルチゾールを反映するため、短期間の評価に使用できるとされている。一般的に血中コルチゾール濃度から慢性ストレスを捉えることは難しいとされるが、被毛では産生される数か月間にもおよぶ長期間のコルチゾールを蓄積するので長期にわたるストレスの判定あるいは慢性的ストレス評価に使用できるとされている。このようなストレス評価はアニマルウェルフェアを科学的な観点から理解することとなり、健土健民とも大きな関わりを持つものである。動物福祉を理解することは本学の建学の精神を理解することにもつながる。

出身地

福岡県大野城市

る。当初は代謝内分泌に関する研究を行っていたが、ストレス関連ホルモンについての研究にシフトし、現在は生理学的なストレス評価の研究が主となっている。家畜から伴侶動物、展示動物など、どんな動物でも要望があればストレス評価を行っている。



建学の精神と酪農学園大学の学生が目指す進路

未来のための「今」を大切に

大学を卒業する時を想像してみてもほしい。自分がやりたかったことができたと考えているだろうか。必要な資格やスキルが身についているだろうか。なりたいた自分になれているだろうか。なぜこのように問うのかというと、大學生生活に慣れてきたこの時期に、今一度自分の目的や目標を再確認し、達成に向けて今の自分の生活や行動、その背景にある心の中を見つめ直してほしいからである。

今から一二年前の話になるが、私も大学一年生の後期に、なりたいた自分になるためにはどうしたら良いのかを考えていた。文系大学に進学した当時のなりたいた自分とは何だったのかというと、「苦手なことを克服して人として成長したい」ということだった。苦手なこととは「人前で話すこと」である。昔から人と話すことが大の苦手で、人前で話すことはできなかった。緊張して頭が真っ白になり、話すことを忘れたり、羞恥心で言いたいことを言えなかったり、そのくらい自分の言葉で話すことが苦手だった。

ただ、そんな自分をいつかは変えなければならぬとも思っていた。学生ならまだ許されるかもしれないが、社会人になるとそうはいかない。なので、学生の内に少しでも自分の苦手を克服すべく、二年生から始まるゼミ選びは、学びたい分野から選ぶのではなく「人前で話せるようになる」という目標を達成するための視点で考えた。そして、自分を成長させられる可能性のある



村上 正弥
(ムラカミ マサヤ)

● 所属
教育センター教務課

● プロフィール

一九九五年生まれ。小学二年から野球を始め、高校は甲子園を目指して札幌日大高校に進学するが、北海道大会決勝で敗退。大学は北海学園大学経営学部経営学科に進学し、勉学・アルバイト・野球の日々を過ごした。卒業後はホクレン農業協同組合連合会に入職したが、やりたいことができ

ゼミを見つけたのである。ゼミ紹介の一文に「私の演習の目的は単に専門的な知識を修得してもらうことではなく、全人格的な成長を実現してもらうこと」と書いてあり、成長するならここしかないと思った。具体的に何をするのかというと、毎回ゼミの時間は個人発表があるので必ず人前で話をする。内容や話し方、自分の癖についても先生から細かく助言をもらうことができる。また、夏休みには各専門分野についてチームで調べ、考えをまとめて発表する。発表までの過程で躓いても都度先生に相談ができ、人の発表を聞いて自分の考えを持って質問する力も付けられる。ただ正直この内容を聞いて、こんな自分でもやっていけるのだろうかという不安な気持ちが強かったが、成長するためにはここしかないと思い、面接を通してこのゼミに入ったことを思い出した。あれから一二年経った今思うことは、苦手なことを完全に克服したわけではないが、ゼミでの楽しい経験・辛い経験が今も役に立っており、当時の自分の心の中での葛藤を乗り越えて、目標達成のためにゼミ選びができて本当に良かったと思う。

自分が将来どうなりたいのかを考えると、必然的に今何をすべきかが分かる。あなたはきっと明確な目標があるはずである。その目標を達成するため、今のままで良いのかを改めて考えてみてほしい。酪農学園大学では、建学の精神に「三愛主義」という人間の内的成長を促す指針と「健土健民」という社会全体の繋がりと物事の本質を捉え、社会に物質的な豊かさをもたらす外的成長を促す指針があり、それを身近に感じ実際に自分で経験しながら学び・成長することが出来る。この環境を大いに活用して、なりたい自分になるために目の前のことに全力で打ち込んでほしい。そして卒業する時、社会人になる時に「あの時頑張ってたよかった」と思える『今』を過ごしてほしい。

出身地

北海道北広島市

ず一年で退職。その後青山商事株式会社(洋服の青山)に入社。販売営業の奥深さを経験。その後数年で新型コロナウイルスが流行し、経営危機のため転職を考える。青山で出会った上司の影響で、いつかは人を育てる教育業界で働きたいと思い現職。施設課で二年勤務し、現在は教務課で学生対応や時間割作成等に従事している。

自分の人生は自分で決める

はじめに

十人十色の大学生活があるが、自分はどんな大学生になりたいだろうか。どれくらい努力をして、あるいは楽しいキャンパスライフを送って、どんなキャリアを選択できれば納得だ、という「感覚」を持っているだろうか。自分はもうしたいのかという感覚を丁寧に扱うことは、自分らしい生き方をすることにつながり、自分の進む方向を教えてくれる。

酪農学園大学への入学を選んだみなさんの「今」の感覚が納得できる方向へと導いてくれるはずである。

キャリアとは、キャリアセンターとは

キャリア (career) とは、経歴、職業などの意味に使われることもあるが、実は、「人が生涯を通じて関わる一連の労働や余暇を含むライフスタイル」つまり「生き方そのもの」である。また、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」をいう。現在、三名のキャリアアドバイザー（キャリアコンサルタント）がキャリアセンターに常駐し、キャリア授業の運営支援や、個々の学生に合わせた支援を行っている。

主体性を身に付ける

主体性という言葉をよく耳にするがその正確な意味を考えたことはあるだろうか。自分の意志・判断で行動しようとする態度のことで、主体的な人は自分で設定した目的を持っており、自分の意志で判断して行動ができる。つ



奥山 航
(オクヤマ ワタル)

● 所属

キャリアセンター事務課

● プロフィール

北星学園大学（英文学科）に入学。二〇一五年に卒業と同時に酪農学園の職員として事務局総務課で勤務。中学・高等学校教諭一種免許（英語）を取得し、教諭としてのキャリアを志したが、職員として教育に携わることを選択。気が付けば若手職員ではなくなってしまうが、日々

まり、ここで言いたいことは「なりたい自分」になるためには「自分で考えて行動する」ことが必要ということである。簡単なようでこれがなかなか難しい、しかしながら最も大切な力とも言えるのである。主体性を身に付ける第一歩として、自分の理想とするキャリアやライフプランを今から考えてほしい。

また、自主性という似た言葉があるが、自主性とは何をすべきか決まっていることに、自ら進んで行動する力のことである。この違いを理解できるだろうか。主体性は「自分から目的を持って、何かを生み出すこと」である。高等学校教育までは自主性の側面が大きいが、みなさんがこれからの大学教育の中で主体的に動けるようになることに期待したい。

自分の感覚を信じる

人間は、多数派の意見や専門家、権力者の発言に依存すると思考停止してしまうものだ。他人に植え付けられた感覚がそのうち常識となってしまう、何が最善で何が本質なのかわからなくなってしまう。自分の感覚を信じるというのは、自分で考え続けるということとイコールである。誰かの意見は参考にしても、自分の感覚を尊重することが必要である。みなさんには感覚的に「こうだ」と思うことには積極的に挑戦してほしい。繰り返しすること、その感覚は正しかったのか、あるいは間違っていたのかを判断する経験を得る。その積み重ねで感覚は磨かれていくので、頭の中でひらめいたことは試すべきである。

チャンスを見逃さないための一番のコツは、行動数を増やすことである。人は何度でも挑戦し続けることができる。しかし、これが最後かもしれないと思う気持ちは忘れてはならない。多くの経験を積み、自分の感覚が一番信じられるものになった時、自分の人生を自分で決めることができるだろう。

出身地

北海道苫小牧市

業務に奮闘中。大学生時代に在学先のキャリアセンタ―から現職を紹介され入社。現在は自分がキャリアセンタ―の職員として働くことに責任と喜びを感じながら働いている。

趣味とは言えないが、休日はまだまだ幼い息子に遊ばれることに時間を費やしている。



酪農学園の教育理念の継承Ⅰ

仲間とともに歩む農業の未来

学びの原点は「人とのつながり」である

私の原点は、酪農学園大学の前身である機農高校（現：とわの森三愛高校）での全寮制の生活にある。男子校での厳しい上下関係の中、衣食住を共にする日々は、当初「失敗したかな」と感じたものの、次第に人間関係やチームワークの大切さを自然と身につけていった。この経験が、現在の「仲間を大切にする姿勢」へとつながっている。

また、黒澤先生の偉大さについては卒業してから改めて感じ、「三愛精神」や「健土健民」の理念は、後からじわじわと自分の中に染み込んできた感じである。

仲間を支えられて今がある

自分は人前で話すのが苦手なゆえ、酪農業を選択したところもある。しかし平成一年、地元の農協役員の話が上がった時、仲間が『お前がやれ』と背中を押してくれた。

農協の役員に推されたことが人生の転機となり、現在のホクレン副会長という立場に至るまで、常に仲間の存在が支えとなってきた。困難な課題に直面しても、仲間とともに乗り越えることで、やりがいを感じている。

先日、地区の会合で仲間と出会った際も、みんな応援してくれており、ありがたいと感じている。

系統理念への深い理解と実践

若い頃は「もつと安価なものを」と系統外の選択肢に目を向けたこともあったが、先輩からの、「自分たちで作った農協なのに、なんで外から買うん



徳田 善一
（トクダ ゼンイチ）

所属

ホクレン農業協同組合連合会
代表理事副会長

プロフィール

昭和五七年に北海道酪農学園短期大学を卒業。厚岸町にて酪農を営み、平成一年より釧路太田農業協同組合の理事を務め、平成二八年に副組合長、令和元年に組合長を経て、令和五年にホクレン農業協同組合連合会の代表理事副会長に就任。よつ葉乳業(株)、ホクレ

だ？」という一言で、はっとし、考えが変わった。系統理念の根底には、農業者が協力し合い、共に支え合う仕組みがある。個々がバラバラに動けば、買い叩かれるリスクが高まる。だからこそ、協同組合の強さを守り、時代に合わせて柔軟に変化させていく必要があると感じている。

ホクレンの役割と未来への挑戦

今までと同じ経営やサービスを行っているだけでは、生産者や消費者の役に立てず、ホクレンは生き残れない。副会長として、私は物流や加工、小売までを含めた新しい流通の形を模索している。北海道が食糧基地としての役割を果たすためには、生産、販売と生産者から少しでも高く買って、消費者に安く届ける。そのためにホクレンがどう動くかが問われている。

若者へのメッセージ

いつの時代も厳しいと言われるが、過去から見てもそれを乗り越えてきたのは若い力であると思う。経験に縛られず、自由な発想で挑戦する若者こそが、農業の未来を切り拓く存在だと感じている。酪農学園大学には「三愛精神」「健土健民」の理念を軸に、人づくり・仲間づくりを続けてほしいと期待している。仲間をつくって、果敢に挑戦してほしい。自分も仲間に助けられてきたから今があると思うている。

地域と農業の未来へ

今後、日本の人口は減少するが、世界では人口が増加し食糧需要が増えていく。だからこそ、国内の生産でしっかりと賄っていくことが大事である。農業は食料安全保障だけでなく、国土を守る役割も担っていると強く思う。北海道の第一次産業の発展が、日本の未来を支える重要な一つの鍵になる。地方から人がいなくなっていくわけがない。一次産業を盛り上げ、みんなが地域社会を守っていききたい。

ンくみあい飼料(株)、(株)北海道畜産公社など多数の関連団体で要職を担い、酪農畜産の発展と系統理念の実践に尽力している。趣味はスポーツ鑑賞とDIY。

出身地

北海道厚岸郡厚岸町



酪農学園の教育理念の継承Ⅱ

学芸員として、キリスト者として

学芸員として生きる

高校時代、植物プランクトンの美しさに魅了され、放課後も休日も、生物部の部室代わりだった生物準備室を占領していた。しかし勉強は嫌いで大学など頭無く、高校卒業後すぐに就職した。だが、何も専門知識の無い高卒は一般事務にしか就けず、失望してすぐに辞めてしまった。日雇いの仕事を転々としつつ、休日は地元の博物館へ出入りして顕微鏡を覗く私に、学芸員や高校時代の先生は大学で学ぶことを勧めた。そこで初めて、テストのためにする勉強と、「好き」をとことん追究する学問の違いを知った。

こうして一九九三年、二〇歳のとき、夜行列車を乗り継いで、故郷の神奈川県から、北海道の酪農学園へとやってきた。

いま、私は十勝の浦幌町の博物館で、学芸員をしている。自然や歴史、文化に関するローカルな資料を集めては、グローバルな学問へと橋渡しする。「学問」の楽しさを人々へ伝える。専門は植物だが、地域のことなら何でも扱う。学芸員としての生き方の根底には、酪農学園での日々の経験が確実にある。

酪農学園での学び

いま考えても、とても泥臭いことをする大学だった。圃場の雑草を調べた



持田 誠

(モチダ マコト)

● 所属

浦幌町立博物館 博物館係
長・学芸員

● プロフィール

一九九一年に神奈川県立新羽高等学校卒業後、気象庁に就職するもすぐに辞め、二年間日雇いを転々とした。一九九三年に酪農学園大学酪農学部入学。一九九八年に幌加内町農業研究センターへ臨時研究助手として勤務しながら玉川大学通信教育部へ編入して

り、標本の作り方を教わったり、植生調査のやり方を学ぶのが楽しかった。松中照夫教授（当時）は「農業は叡智の結集である」と、健土健民の「健土」とは何かを力強く語られて感銘を受けた。附属農場の義平大樹助手（当時）をお願いして、収量調査などの手伝いをさせてもらった。顕微鏡は山舗直子助教授（当時）の生物学研究室で借りて、相変わらずプランクトン観察も楽しんでいた。二週間の酪農実習で農家に住み込み、教科書には書かれていない農村の実態を学んだ。

野生動物生態研究会に入部し、先輩から植物を調べることを命じられた。任されて勉強してみると、動かない植物は動物よりも自分に向いていることが分かり、次第に面白くなってきた。海野芳太郎助教授（当時）の研究室へ入り、雑草や野生植物の生態学を学んで、卒業論文さらには研究生論文とした。今後さらに専門的に学んで、自然史分野の学芸員を志そうと決めた。

キリスト教信仰との出会い

酪農学園がキリスト教系の大学だと知ったのは、入学手続きの段階だった。当初は「なぜ自然科学の大学がキリスト教主義なのか」と反発ばかりしていた。大学礼拝を司っていた山口博宗教主任（当時）は、そうした声に真摯に向き合ってくれた。宗教主任室で車座になって語ったり、学外の方による特別礼拝などを聞くうち、心はいつか神の方を向くようになっていった。

旅先では、その土地の教会を訪ねるようにしている。北海道では必ずと言って良いほど、酪農学園の卒業生がいる。信仰をもって地域に根を張って生きる、三愛精神の実践者たちである。「酪農讃歌」はキリスト者の生き方を高らかに謳う。私は、キリスト者学芸員として生きること、実践していきたい。

学芸員資格取得。北海道大学大学院農学研究科へ進み二〇〇六年に博士課程修了。

北海道大学出版会、北海道大学総合博物館、小樽市総合博物館（北海道鉄道文化保存会）、帯広百年記念館を経て、二〇一五年から浦幌町立博物館に学芸員として勤務している。

この間に洗礼を受けてキリスト者となり、カトリック釧路教会に所属している。

出身地

神奈川県横浜市



酪農学園の教育理念の継承Ⅲ

思い描いた通りには全然ならない！ それでも酪農学園での学びは生きる！

何を学び将来にどのように生かしていくかというキャリアプラン、キャリア教育は、今でこそ大学進学に限らず、若いうちから当たり前に行われている。皆さんは酪農学園大学で学びたいこと、明確な専門分野への希望があった進学された方が多いことと思う。そうでない方も四年ないし六年間を通じて様々な分野の学びを進めてほしい。

在学当時を振り返ると、キャリア教育というものは明確には存在しなかったし、とにかく人口が多い世代のため、本学が第一志望の人、そうではなかった人、色々な背景を持つ同級生がいた。入学当初は好景気のさなかで、のん気に構えていた。就職先は選り好みせず、卒業後は定職に就かず、短期のアルバイトで貯金しては旅行や好きなことをして、またアルバイトを繰り返すフリーアルバイター、略して「フリーター」が通常の生き方として受け入れられる明るい時代でもあった。ところが好景気の正体はいわゆるバブル景気で、その後の長期にわたる不況の時代が在学中に始まった。男女雇用機会均等法はまだ努力義務の時代で、不景気の中での女性学生の就活は、困難を極めた。進路希望は食品系企業の研究開発や品質管理、あるいは公的機関での食品科学系研究職であった。ところが不況の折り、企業は新規採用人数を抑制、公務員志望は殺到し倍率は非常に高く、希望の職に就くことができなかった。いきなり後ろ向きな話題で恐縮ではあるが、現在、農業試験場の研究員として農産物の品質評価の研究を行っている自分について、結果的には希望の



梶田 路津子
(カジタ ルツコ)

● 所属

地方独立行政法人北海道立
総合研究機構農業研究本部
中央農業試験場

● プロフィール

一九九四年酪農学園大学酪
農学部食品科学科卒業
卒業後、北海道職員として
網走支庁、石狩支庁、空知
支庁で農業行政に従事。
二〇一〇年北海道立総合研
究機構（道総研）創設に伴
い、北海道立中央農業試験

職に就いてはいるもののその経緯は学生の頃の自分では、全く想像ができなかった世界なのである。

卒業後は、地方公務員として農業行政分野で土地改良、農業振興地域の土地利用調整、畜産振興、地産地消、食育、米の生産調整、農業金融、担い手育成など農業に関する幅広い分野を担当した。また、ダチョウ肉の活用やエゾシカの農作物被害対策なども担当した。紆余曲折を経て地方独立行政法人職員として研究職に就くことができたが、当初は全く専門外の圃場作業で何百種類もの豆類を栽培し、種子を長期保存する植物遺伝資源の保存管理分野を担当し、ようやく農産物の品質評価という希望の専門分野の試験研究を担当するに至った。

大学では教職課程を履修したこともあり、食品科学に特化した科目以外に、作物学や土壌肥料など農業生産に関する分野、人文科学系の分野も割と幅広く学ぶ機会を得た。それが結果的に現在までの仕事に生かされていると感じる。と同時に、当時は希望する専門分野以外の科目履修に全く身が入っていなかったが、今にして思うと、もっと積極的に学んでおけばよかったと後悔している。

幸いにして、酪農学園大学は生産から流通、消費、そして、現在では私の在学当時はなかった自然環境の分野を含め、農業を取り巻く様々な幅広い分野を学ぶことができる。この大学の強みであると思う。混沌の時代にあって、皆さんは将来、現時点で思い描いたプランからは想像もつかないようなキャリアを歩んでいるかもしれない。今はプランが明確でない人も心配しないで、幅広い分野を学び、学業、サークル活動、アルバイトなどを通じて様々な人と交流を持つこと、体験の幅を広げることが将来に役立つであろうと頭の片隅に入れて、酪農学園大学での学び、そして学生生活を大いに楽しんでいただければと願っている。

出身地

北海道紋別郡遠軽町

場（道立中央農試）から組織改組された道総研中央農試に異動、現在まで試験研究業務に従事

二〇一三年酪農学園大学大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻修士課程修了

継承編講師一覧（2011－2024年度）

実施 年度	講演 タイトル	講 師			
		氏名	所属 (当時)	卒業 修了 年度	学科 研究科
2011	国際問題への理解 ～「三愛精神」にふれて	小林 毅	特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ ジャパン 事務局長	1973	短期大学
	大きな目標を抱き前進せよ	生出 正実	(財) 北海道三愛畜産セン ター	1963	酪農学科
	「健土、健民、健産のバ ランス」とは	河原 淳	NPO 法人えんの森 事務局長	1982 1984	酪農学科 酪農学研究科
2012	酪農学の教育理念の小さ な継承	秋葉 保	聖隷学園聖隷クリスト ファー大学	1969	酪農学科
	学園で学びその後四七 年、今想うこと	松山 増男	(有) トンデンファーム 代表取締役	1964	酪農学科
	「人、動物、そして自然」 ―野生動物保護を通して 地球を診る―	森田 正治	森田動物病院院長 NPO 法人道東動物・自然 研究所理事長 別海町野付半島ネイチャー センター長	1968	獣医学科
2013	I'm Proud to be a ... Farmer. ―農業の豊かさを求めて―	永井 進	(株) 永井農場 代表取締役	1990	文理科短大 酪農科
	「土を愛する」精神を継 承する	渡辺 兵衛	日本キリスト教団八雲 教会牧師	1969	酪農学科
	私の目指す農業	上村 篤正	(有) ウエムラ牧場 代表取締役	1991 1993	食品科学科 酪農学研究科
2014	キリスト教が日本の酪農 民の心に大きな影響を与 えた	名久井 忠	元酪農学園大学教授	1963	短期大学
	黒澤哲学の農業経営への 適用 ―経営理念の明確化で未 来を拓く―	石田 陽一	(有) 石田牧場、(株) め ぐり 代表取締役	2006	酪農学科
	彼女たち（私）の獣医学 入門	石井万寿美	まねき猫ホスピタル獣医師 アニマルライター	1984 1986	獣医学科 獣医学研究科
2015	次世代放牧への挑戦 ―原料に勝る製品なし―	塩野谷孝二	(有) レークヒル牧場 牧場長	1995	酪農学科
	自分が望む変化となる	松代 有生	フリーアナウンサー ラジオパーソナリティ	2003	酪農学科
	人の想いは実現する ―国際協力の魅力―	南 繁	ガイア動物病院 院長	1972	獣医学科
2016	きっかけが今の人生	片岡 朋子	(有) 夢がいっぱい牧場	2011	食品科学科 健康栄養学専攻
	地域を支える畜産業	浅野 政輝	(有) 浅野農場 代表取締役	1996	酪農学科
	この土の器をも ―「健土健民」を海外技 術協力で実証したい―	要田 正治	(独) 国際協力機構 JICA	1986	獣医学科

2017	卒業しても近い酪農学園大学	逢坂ゆき子	横山製粉（株）営業部 開発課	2009	食品科学科
	「健士健民」私のチャレンジとロマン —新しい日本酪農の未来を求めて—	井下 英透	農事組合法人 Jリード代表	1980	酪農学科
	Zoo医師のおしごと	秋葉 悠希	日立市かみね動物園	2014	獣医学科
2018	ミッション —酪農学園大学の使命と自分の使命—	安藤 博之	DSファーマアニマルヘルス（株） 営業本部 CA事業部 東日本支店	1987	酪農学科
	道北 池田牧場 三代目の挑戦！！ 「変化すべきところ」と「受け継ぐべきところ」	池田 辰実	道北 池田牧場 代表	2005	食品科学科
	NOSAI 臨床獣医師の業務と使命	廣田 和久	北海道農業共済組合連合会 家畜部	1984	獣医学科
2019	ないものは、つくる ～野外ロックフェスとDo It Yourselfの精神～	草野 竹史	NPO法人 ezorock 代表理事	2001	経営環境学科
	有機農業の実践と建学理念 ～理念を体現していくこと～	小路 健男	無何有の郷農園 農園主 北海道有機農業協同組合 代表理事組合長	1984	農業経済学科
	「酪農」から流れてたどり着いた先には？！ —乳搾りの出来る社会福祉研究者？？？—	大澤 史伸	東北学院大学教養学部 地域構想学科准教授	1987	酪農学科
2020	建学精神を学び健士健民を実現する技術の研鑽 (創意を尊び革新を目指して) ～ほんもののミルク・チーズを求めて～	三浦 学	(株) のほりべつ酪農館 代表取締役社長	1986	酪農学科
	自分らしく生きるために	田中 仁	(株) 仁 代表取締役	2002	経営環境学科
	自分に出来ることって何？ ～ With コロナの時代に生きる～	松尾 直樹	野幌南どうぶつ病院 院長	1983 1985	獣医学科 獣医学研究科
2021	酪農学園で得たもの	鎌田 一宏	北海道岩見沢農業高等学校 校長	1986 1988	酪農学科 酪農学研究科
	ソムリエの仕事と酪農学園の学び	水上 貴	新さっぽろアークシティ ホテル事業部	1997	農業経済学科
	自分らしく生きるために	田中 仁	(株) 仁 代表取締役	2002	経営環境学科
2022	モヤモヤする感覚を楽しむ生き方 —世界も人も複雑だからおもしろい—	有坂 美紀	Co. DESIGN 代表	1999	短期大学部
	畜産農家のために働くこと	梶原 綾乃	北海道NOSAI 十勝統括センター 東部支所 池田家畜診療所	1997	獣医学科
	酪農を楽農にする経営コンサルを目指して	鶴羽 裕樹	株式会社しんじゅ 経営相談課 課長	2004	経営環境学科

実施 年度	講演 タイトル	講 師			
		氏名	所属 (当時)	卒業 修了 年度	学科 研究科
2023	地域を存続させていくために	北野 裕介	北野ファーム	2006	農業経済学科
	学芸員として、キリスト者として	持田 誠	浦幌町立博物館 学芸員	1996	酪農学科
	モヤモヤする感覚を楽しむ生き方 —世界も人も複雑だからおもしろい—	有坂 美紀	Co. DESIGN 代表	1999	短期大学部
2024	地域を存続させていくために	北野 裕介	北野ファーム	2006	農業経済学科
	学芸員として、キリスト者として	持田 誠	浦幌町立博物館 学芸員	1996	酪農学科
	モヤモヤする感覚を楽しむ生き方 —世界も人も複雑だからおもしろい—	有坂 美紀	Co. DESIGN 代表	1999	短期大学部

※酪農学園大学短期大学部の沿革

- 1950(昭和25)年3月14日 酪農学園短期大学酪農科設置認可
- 1950(昭和25)年4月1日 酪農学園短期大学開学
- 1962(昭和37)年3月23日 酪農学園短期大学に製造科設置認可
- 1964(昭和39)年4月1日 酪農学園短期大学に酪農科第2コースを設置
- 1964(昭和39)年6月16日 野幌高等酪農学校を酪農学園短期大学酪農学校と校名変更
- 1972(昭和47)年3月31日 酪農学園短期大学製造科廃止認可
- 1984(昭和59)年4月1日 酪農学園短期大学第2コースの学生募集を停止
- 1984(昭和59)年12月22日 酪農学園短期大学教養学科設置認可・酪農学園短期大学の校名を北海道文理科短期大学と変更認可
- 1989(平成元)年12月22日 北海道文理科短期大学経営情報学科設置認可
- 1991(平成3)年1月11日 酪農学園短期大学酪農学校廃止認可
- 1998(平成10)年4月1日 北海道文理科短期大学の校名を酪農学園大学短期大学部と変更・酪農科を酪農学科と変更
- 1999(平成11)年12月22日 酪農学園大学短期大学部教養学科、経営情報学科廃止認可
- 2012(平成24)年10月12日 酪農学園大学短期大学部廃止認可

おわりに

建学原論テキスト企画編集担当者

建学原論二〇二五年度「現状編」と「継承編」をまとめることができました。本稿をご執筆下さり、そのご講演をいただく各位に感謝申し上げます。

私立大学は、創設者の思いを込めた建学の精神を掲げることができません。酪農学園大学では、創設者である黒澤西蔵が提唱した「三愛主義」と「健土健民」です。それを基に「実学教育」を展開しています。

前半部分は、西蔵が貧農の出であったとの事実説明から始まりました。その生活苦でも、母親は子供たちに愛情を注いで教育し、西蔵の人格形成に良好な影響を与えました。後に、足尾銅山公害被害者の窮状を見聞した西蔵は、その救済活動に身を投じました。また、日本をより良い国にするために畜産振興の必要性を説いた多くの賢人の薫陶を受け、自ら酪農業を始めました。

西蔵は、心からの愛、看過できない惨状、望ましい将来を見抜く感性がありました。それに応じた行動力もありました。皆さんにも、今以上に感性を磨き、必要な行動力を身に付けて欲しく思います。紙面の都合上、その方法の結論だけを書きます。感性も行動力も、当面は、講義や実習に真面目に取り組むことで自然に身に着いていきます。大学は受け身だけではなく、自ら学ぶ場でもあります。しかし、受け身も出来ないで自ら学ぶことができるはずがありません。

後半部分の講義では、「現状編」を本学の教職員に、「継承編」を本学の卒業生に担当して頂きました。本学は命・その源泉となる農業、環境と食を主要な課題として教職員が一体となって教育、研究を展開しています。「現状編」では、建学の精神を踏まえた上で、教職員が皆さんの声にも耳を傾けて教育や研究等に従事しており、その内容を紹介します。「継承編」では、そのような教育環境下で卒業された先輩諸氏の職場体験が主に紹介されます。いずれも、皆さんのこれからの生活の指針となる「贈る言葉」です。傾聴の上、真意を理解して欲しいと願います。

建学原論の全体像を把握することが、皆さんの将来に役立つと信じています。

建学の精神と酪農学園大学の使命

二〇一一年九月十四日 第一版第一刷発行

二〇二五年十一月一日 第十五版第一刷発行

企画・編集
建学原論運営委員会

石井 智美、中出 哲也（五十音順）

発行者
酪農学園大学

〒〇六九―八五〇―一 北海道江別市文京台緑町五八二

電話 〇一一―三八六一―二二一代

印刷所

社会福祉法人 北海道リハビリ

〒〇六一―一九五 北海道北広島市西の里五〇六

電話 〇一一―三七五―二二二

氏名：



生きるを学ぶ。
学びが生きる。



酪農学園大学は、2020年度（公財）
日本高等教育評価機構による大学機関
別認証評価において大学評価基準に適
合していると認定されました。

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、
練達は希望を生む。

ローマの信徒への手紙
5章3～4節